

文化

bunka@ryukyushimpou.co.jp
TEL098-865-5162

2005年(平成17年)3月15日 火曜日 版(34)

沈黙に向き合う 沖縄戦聞き取り47年

石原 昌家

(101)

沖縄戦中は3、4歳で、中・高校から下った信濃、台湾の宜蘭に住んでいた私。真下方面の洞窟で米軍がだが「疑似沖縄戦体験」だを任している。ロシア軍を産んだという母親のからの猛攻撃下でも待ったなしに聞いて、映像化、された出で生まれてくるウクライナの赤ちゃんの映像がうつる

や、官野酒量数集外れ(南西)のガマの中での出産。浦添落塚の避難壕内は親戚らでひしめき合い、座ったまま出産したという私の旧友の母親、浦添沢崎大橋の西側の崖下、昭利薬科大付

核兵器なくす努力を

世界連邦婦人の会設立記念
湯川氏の妻スミさん講演



世界連邦婦人の会設立記念講演会。湯川スミさんの講演の様子。

れた母子は、敵兵の米軍に救出され、思いもよらず米軍保護のもとで生き延びる事ができた。
旧友の弟の赤子は、乳の出ない母親を見かねたひとりの日本兵がミルク1缶を与えてくれたので、命をつないでいた。だが、南部隊をさまよっているとき、

無戦世界②

「命どう宝」の行き先 世界を一つの連邦国家に

変子だけ被弾死してしまっ。激戦場のなかでお産した体験者から聞き取りした4名中、3名の赤子が生き残ったのは奇跡だった。3名のうちの一人は、いまも健在だが確認できることを前向きに話さず、命をつなぐ。フィールドワーカーとして庶民の生活史を聞き取り

が、ウクライナがロシアと別なく南西諸島の戦場化を拒むという一点で結集した「命どう宝の会」の行く先は、やはり、保守も革新も区別なく結集している世界連邦運動に行き着くと思える。戦争体験者が死者の慰めも代弁するが、よろしく聞いていることを、私はぐみ取っていくのが、聞き取りしてきた者の義務と思っ

りてきた私は、生活者の視点で戦争を見つめ、その先を考えている。
孫の発想
3月15日、「フーモア沖縄戦・命どう宝の会」の設立集会上、私にとって、沖縄戦の「あり」だけの地域を集めたような戦場が、ラッシュバックするかのようになつていく。その中で、7人間のスピーチを求められた。短時間で何を語れるか。未来を語り、15歳の孫からヒントを得て、思った。テレビでの戦場書

孫の発想

二七教授

3月15日、「フーモア沖縄戦・命どう宝の会」の設立集会上、私にとって、沖縄戦の「あり」だけの地域を集めたような戦場が、ラッシュバックするかのようになつていく。その中で、7人間のスピーチを求められた。短時間で何を語れるか。未来を語り、15歳の孫からヒントを得て、思った。テレビでの戦場書

いま、「世界平和の礎を沖縄祭の世界プロジェクト」を提唱している平良島昭氏が集会参加者の一人として語るには、数年前、世界連邦運動の講演会が沖縄県立武道館で、湯川秀樹ノーベル賞受賞者の奥さんを迎えて、盛大に開催された。ほくほくとした声で、大に、国連の世界連邦への進化を願って、琉球新報の論壇に投稿した。947年に予定。5年後に婦人の会も結成されたとも報じていた。(次回も世界連邦について)

(次回は5月後半掲載)

交流協定

琉球大と
ハワイ大

2005年3月15日付の「琉球新報」

日展作品などを寄贈

本社に贈呈案の平良未希

世界連邦婦人の会設立記念講演会。湯川スミさんの講演の様子。